

## 本気三題

佐藤 信

九鬼葉子さんによる例年通り周到な選考経過を読みながら、選考会でのおのれの優柔不断な「迷走」ぶりにあきれ果て、苦笑しました。おまけに公開選評会の席上では、「劇作家よ、しっかりしろ！」なんて息巻いて、檄までとばしてしまいました。

でも、いろいろ本気はたしかです。恥の上塗り覚悟でそのあたりを少し。

本気、その一。戯曲賞はひとつのお祭り、というか強いて言えば「遊び」であるということ。受賞者が「やったー」と、その他の候補者が「くっそー、選考委員の目は節穴かっ！」と叫ぶ瞬間をつくり出す、ただそのことのためにだけ賞は存在します。

不思議なことに、どんなに反対した作品であっても、受賞がきまったあとに読み返してみると、前には気づかなかったオーラをかならず感じます。今回は、佳作受賞の植松厚太郎さん『午前3時59分』がそうでした。若い作者の個性がとらえようとした「いま」には、こう書くしかない、そして作者本人にとっても、この瞬間にしか書けないという、ブリリアントな必然性を感じました。自分の過去の経験からも、賞による「裨」効果、あるいは「バネ」効果を信じています。

本気、その二。戯曲賞に権威なんてこれっぽっちもないということ。そんなものが張りつきそうになったら、さっさとやめた方がいいに決まっています。だからこそ、毎回、候補作を（可能な限り）注意深く読み、選考会では（可能な限り）真剣に議論します。選考基準は毎年かわります。かわることをいつも突きつけられています。社会から、観客から、演劇の仲間たちから。そして、その時々候補作の作者たちからも。

選考基準とは、つまり、演劇や戯曲への価値の基準です。あたらしい価値づくりに失敗はつきもの。せめて意味のある失敗であればというのが、かろうじて言える偽りのない心境です。

大賞を受賞した山崎彬さんの『メロメロたち』と田中遊さんの『私と本屋の嘘』とを、同じまな板の上にのせるなんて、考えてみればそもそも無茶な話です。ほんらいならば、山崎さんには山崎さんの演劇系のなかでの価値基準、田中さんには田中さんの演劇系のなかでの価値基準を通しての評価から、きちんと組み立てていかなければならないのはわかっています。

でも、賞は「評論」や「試合」の場ではありません。ぼく自身でいえば、結局、担保にしているのは、知識や経験や技術ではなく（そんなもん、もともと、大した持ち合わせもありませんが）、かろうじて実作をつづけている劇作家としての自分の「いま」だけです。これからの自分の作業をあらかじめ人質に差し出した上で、まずは、山崎さんの暴走に「こんちくしょう」と〇印、田中さんの幻想に「本屋の迷路、いいな」と〇印、と、自分流の物差しからはじめてみるしかやり方を知りません。そして毎回、議論を通して、その物差しを自分でペキッと折っていくのです。

本気、その三。すべての演劇は「社会派」であり、「政治劇」であるということ。演劇の「社会性」「政治性」についてことさら無頓着な「娯楽劇」は、しばしば露骨な政治的プロパガンダに転化します。昨今、この国のお上りが突如口走りだした「稼げる文化（演劇）」だって。放っておけば、いつの間にか「いつか来た道」です。

公開選評会が終わったあと、顔見知りの演劇ファンの女性から、「やっぱりOMS戯曲賞はそうなんですわ」と声をかけられました。OMS戯曲賞はエンターテイメント系の戯曲には点が辛く、どちらかというと、破天荒な実験的作品に評価が偏りがちだというのが世間の通り相場というのが、彼女の感想です。そうかも知れない。でも、ちょっと違うかな、とも思いました。

上田誠さんの『来て見つかるべき新世界』は、昨年の岸田戯曲賞を受賞して、選評でも圧倒的な好評を得た面白いテキストでした。はじめは文句のない〇印。それなのに、どうして最後までは推せなかったのかと言われれば、ぼくの場合、「娯楽劇」の「社会性」「政治性」のことが、頭のどこかにあったからだと思います。

選考会の席上で、上田さんの今後への期待を、チェーホフになぞらえて語ってみたいしたのはその意味です。渡辺えりさんからは、即座に、「チェーホフの小市民性」を指摘するすどい横やりが入りました。

次回、25年目をむかえるOMS戯曲賞。ぼくが願っているのは、「娯楽劇」であれ「実験劇」であれ、ひろく世界を見渡せる、劇場らしく面白い演劇の誕生です。間違いなく、本気です。